ものと見做されてゐた。故に未だ茶道を學問的に研究したものは殆んど無かつたと云つてよい。併し茶道は喫茶喫飯、飲酒の禮を行ふに當り、あらゆる道具を使用する其の道具の綜合藝術であつて、確かに學問の對象として研究する價値があるものであるこの見解から、各方面より歴史的材料を集め、加ふるに著者の名器に對する該博なる知見を活用して、茶道、名物茶器の由來等を史學的藝術的に研究しやうと試みたものが本書である。其の目次の大要は總說、茶の歴史、茶道の成立、英雄の茶、茶會、懷石、茶室と茶庭、掛物、花入、茶入、茶碗、拜見を請ふ茶器、茶人系譜及び流派、結論、とし、多數の口繪及び挿畫を附し、最後に一般索引及び引用書索引を添へてある。叙述の體は極めて通俗的、解說的であつて、而も隨所に茶の趣味を現はさうと勉めてある。茶道に趣味を有する人士の一讀を要するものである。(四六判三四六頁、東京大岡山書店發行、價三、八〇)〔以上松野〕

◎東洋史概說　松井等著

本書は去る四月公にせられ著者が多年の間幾多の大學專門學校に於て講じ又講じつゝある東洋史の講案を整理したものである。自ら序に於て、東洋史に關する新しい見解と細かな研究とが次々に現はれて來るにつけても、自分の書き溜めた原稿がひどく見劣りして之れを公にするのが如何にも氣恥しく思はれると述べてゐるが、本書の內容をうかゞへば如何に著者が是等の點に周密な注意を拂つて學界に現はるゝ新知識をとり入れ之を適當に內容に織込まれたかゞ首肯される。歴史が單なる事實に關する記述に止る時代は過ぎて思想的根據の上に立脚して之を把握せんとするは近來の顯著な事實であり、現在に於ては東洋史のみ獨り取り殘された如き觀がないでもない。之は一つには東洋史の中心をなす支那そのものゝ歴史が甚だ斷片的で纒め難い點にも存する事と思はれる。歴史は過去から現在への事象の變移を其流動の姿について說明すべきもので其事は著者の云ふが如く今日の東洋史に於ては至難の業であるが然し乍ら將來東洋史家の最大任務はこゝにあると思はれる。此點について本書は著

者自らの理想には合して居ないかも知れぬが、其說明の方針と輪廓とについての卑見を公にする意味に於て稿を起したものであらう。近來漸く東洋史概說の現れはじめた中に於て本書は特に注目すべきものとして推奬を惜しまない。（菊判、挿圖六、三五七頁、二、五〇圓　共立社）

◉東亞同文書院創立三十週年記念論文集

創立三十年を記念する爲去る五月同文書院より發行された六八〇頁に達する論文集で、日華人八名の執筆に成る。卽ち支那鐵道外交史論稿（馬場鍬太郎）、淸朝時代に於ける銀、錢比價の變動に就きて（小竹文夫）、史記貨殖列傳論稿（穗積文雄）、陰陽哲學を現代に生かしめば（李洪）、支那會計學の根本問題（有本邦造）、輓近支那に於ける疑古派並に正統派の思想に就て（熊野正平）、上海の一考察（彭阿本）、華語與漢字的音變遷（齊勳）、の八篇を收めてある。支那鐵道外交史論稿は主として日淸、日露兩戰役の間、所謂利權獲得競爭時代に於ける英佛獨露米各國の對支鐵道利權獲得について詳述してゐる。近代支那に於ける銀の問題は頗る重大な問題で中にも銀錢の比價從つて錢價に變動があれば之が種々の點に於て社會に及ぼす影響極めて大なるものがある。小竹氏の論文は此法定比價が順治以來如何に變動したかを細密に研究して、其强制程度から淸朝を大體雍正以前と乾嘉時代及び道光以後の三に分ち、道光時代銀價が最も騰貴して法定比價の存在を失ひ淸朝財政窮乏の一因となつた次第を明にしたものである。史記貨殖列傳論稿は筆者の試みつゝある二十四史食貨志研究の首卷史記の食貨志に該當すべき貨殖列傳によつて司馬遷の經濟應列傳諸家の經濟思想を見列傳中に盛らるゝ經濟思想が何れも前科學的段解にあり其所に經濟思想は之を求め得るが未だ經濟學は見出し得ぬと說いてゐる。陰陽哲學を現代に生かしめば、は性命（生命その者が實體上陰陽相待性的二元に分つてゐる事を主張する陰陽相待性的生命）哲學の提唱であり、支那固有の陰陽學說を印度歐米の哲學と近代科學とに洗禮を受けしめて立論したもので、特に陰陽相待性原理と創造的分混化原理とを高唱する、有本氏は會計學は貨幣の存在

を前提とするもので、現在支那の雜然たる貨幣の價値單位は銀兩及洋元の二元的になつてゐる故に、記帳單位の研究を以て支那會計學の根本問題と名付け、目下の支那貨幣の狀態より考究すれば記帳單位は洋元が適當で、しかも一般に通用の洋元を以て貨幣の單位とすべきを論じて居る。輓近支那に於ける疑古派並びに正統派の思想に就いては其代表的人物たる康有爲譚嗣同及び章炳麟の思想を解剖し、上海の一考察は一切の罪惡の滋生するコスモポリタンの都市上海を舞臺として社會惡に就いての見解である。最後の華語與漢字的聲音變遷は之を二分し一は從前的研究とし更に之を時間上的變遷、空間的變遷に分ち、一は現在的考證で之を唇音、牙喉音、舌齒音、貫通諸部の四に分類して論じたものである。以上八篇古今多方面に亙るが意義ある力作が多く、躍動する支那と特に密接の關係に立つ同文書院の記念出版として、眞に適當の出版と云へやう。(菊判、六八〇頁、同文書院支那研究部發行、上海北四川路底內山書店賣捌)〔以上今石〕

◉ルネツサンス史概說

文學博士　坂口　昂著

本書は西洋史上、ルネツサンス・プローパーとも稱すべき伊太利ルネツサンスに就いての概說であつて、著者の最後の研究發表、言はゞその墓標である。本書に於て著者がルネツサンスに向けた觀察の焦點は、凡そ二つあると言へやう。古典學藝と云ふ文化種子が、十四、五世紀に至つて、突如萌芽し、生長し、花咲いて所謂ルネツサンスとなつたのでなくて、通常暗黑時代と言はれてゐる約一千年に亙る中古期の歷史的發展の中に、その文化種子の發芽生長すべき土壤が用意されたのである、といふことがその第一焦點であり、而して、一旦萌芽した古典學藝及その精神が、如何に近代的に生長し、花咲き、實を結んだか、といふのが第二の焦點となつてゐる。全篇六章、その前二章が第一焦點に、後四章が第二の焦點に合するものと觀られる。

著者は單に學藝についてのみならず、政治、經濟等にも